

■楠本端山 儒者。幕末維新期の諸儒中の第一人者で、維新の際に平戸藩を平穏無事に導く治政を行った。

くすもとたんざん

シボク事件・1828=

肥前針尾島で、楠本費斎(名は砥伴)の長男に生まれる。伝えるところによれば、楠本家は楠木氏の後裔であるという。代々農を業としたが、祖父丈助のとき平戸藩に仕えた。

鼠小僧磔・1832= 4歳：のちに、三島中洲から「西海の二程」と並称して称えられる弟碩水が誕生。

大塩平八郎乱1837= 9歳：

天保改革弾圧1842=14歳：平戸に出、佐々鶴巢に就いて詩文を学び、

阿部正弘首座1845=17歳：

孝明天皇・1846=18歳：

・・・1848=20歳：旅に出て、肥後の沢村西破、日田の広瀬淡窓、筑前の吉田平陽、佐賀の草場侃川などを歴訪、家に帰って「桂機日曆」を著わした。しかしこれらの儒者から得るところはなかったという。

尊徳報徳論・1851=23歳：佐藤一斎の門人で、藩の家老葉山鑑軒の推挙で、江戸に出て一斎の門に遊び、門人の吉村秋陽・大橋訥庵の講義を聴いて大いに感激、辞章の学を放棄して宋明心性の学に篤く志を用いるようになり、

万次郎帰国・1852=24歳：帰藩して、藩学教員兼侍講となる。

ペリー来航・1853=25歳：黒船来航で幕藩ともに海防の論議に湧くと、「銘堯巷議」「杞憂臆言」を著わして、治政の要道、国防の緊要および国体の尊厳などについて論じた。

安政大地震・1855=27歳：侍講の革新をはかるも、先輩と意見が合わず、郷里に退居、

もっぱら朱子学を修め、この間、訥庵の依嘱で、「開邪小言」の跋を書いている。

桜田門外変・1860=32歳：

生麦事件・1862=34歳：藩主松浦詮の懇請で、再び平戸に出て侍講となり、近侍・大小姓班を経て助教兼侍講となり、藩主の篤い信任を得て藩政を改革。

禁門の変・1864=36歳：

また弟碩水と動王の大義を首唱し、「藩祖肥州公伝」を書いて肥州公(肥前守松浦定)の動王の事蹟を述べ、藩主を激励して王事につとめさせた。端山の学徳は京師にまで聞こえ、名古屋藩主徳川義宜など特にこれを敬仰し、その藩士を平戸の桜溪書院まで派遣してきた。

明治維新・1868=40歳：維新に際しては、周辺の諸藩が政情不安のなか、平戸藩だけが平穏無事で、

戊辰戦争終・1869=41歳：大番頭奉行となり、

やがて権少参事を歴て権大参事となったが、

廃藩置県・1871=43歳：廃藩置県に際しても、治政宜しきを得て、平穏裏に土地人民を朝廷に奉還。その後しばらく県政に参与したが、上司と合わず、辞任して閑地に屏居、

明治6年政変 1873=45歳：

しかし世を憂えるの情もだしがたく、三条・岩倉・西郷・大久保などの諸公に建白して、大いに明治新政の方途を陳述したが用いられず、

・・・1880=52歳：旧藩主の依嘱により、旧藩士の子弟教育のために平戸に猶興館を創立するも、

明治14年政変1881=53歳：針尾島に引退し、弟碩水と風鳴書院を建てて子弟に教授したが、

新体詩抄・1882=54歳：

岩倉具視没・1883=55歳：中風で没した。